

大阪商業大学学術情報リポジトリ

太宰治『駈込み訴へ』の表現
一人物呼称と評価語彙「美しい」を中心にー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2023-03-28 キーワード: 作成者: 増田, 正子, MASUDA, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1664

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



太宰治『駈込み訴へ』の表現

— 人物呼称と評価語彙「美しい」を中心に —

増田正子

- 一、はじめに
- 二、先行研究のまとめ
- 三、人物呼称の数と場面、意味づけ
- 四、評価語彙「美しい」を中心に
- 五、おわりに

一、はじめに

太宰治の小説には、「語り」とりわけ「一人称独白体」の形式を持つものが一定数ある。かつて、太宰治の『駈込み訴へ』について拙稿「太宰治の表現―『駈込み訴へ』における独白体―」で分析を試みた。^①その後、国語教育に携わりつつも、表現論への関心は続いている。拙稿の冒頭にも引用した吉本隆明の言葉（この時期の話体の作家のうち《私》意識の解体と劃一化^②という契機を崩壊とか風化ではなく、積極的な意味で構成的な話体の意識としてとらえたのは、おそらく太宰治だけだった^③）を起点として、再度問い返すべく、新たな論を試みた。

拙稿の発表から数十年間、太宰文学の研究は様々な領域で進んでいるが、表現論や「語り」の研究に関してはいまだ説明すべき課題は残し

ている。拙稿「太宰治の表現―『駆込み訴へ』における独白体―」では、場面構成による分析、語りの場（物語言説）と物語の場（物語内容）のずれを問題とし独白体の表現構造を中心に論じたが、枠組みの提示に留まっていた。

本稿の目的は、人物呼称を中心とした分析により、「語り」の構造を明らかにすることである。先行文献に知見を得つつ、呼称のあらわれ方と表現の場面、またユダのキリストへの感情の変化との関係、さらに「聞き手」意識のあり方を分析する。また、人物呼称と関連し、キリストに対する評価語としての「美しい」他についても考察する。

二、先行研究のまとめ

『駆込み訴へ』は昭和十五年二月に発表された中編小説である。太宰が盃を含みながら憑依したかのように一晩で一気に語り、それを口述筆記させ、その後の改変もほとんどなかったという逸話も有名である。

「駆込み」訴えるという語りのスタイルで、「聖書」のユダの裏切りが描かれている。いわゆる「現実家」のユダは弟子の一人としてつき従っているが、「人の子」としてキリストを愛し、同じ人間として「寂しさ」を通わせあえることを切望した。その根底にあるのは、同じ男性で同年齢であることからくる「対等意識」であろう。キリストを「美しい人」「正しい人」「優美な人」と呼ぶユダは「精神家」として崇敬と愛を抱くが、最後の晩餐で「潔くない」と自身を否定され復讐を決意する。そして「金」での裏切りとキリストから疎まれていた商人としての名乗りをあげ「訴へ」を完遂させる。聞き手である「旦那さま」への一方向の訴えであり、「駆込み」という肉体化されたリズムで一気に語られるが、文体は丁寧体・常体が混在し、感嘆符や短文がある一方、四字熟語を含む講談調の調子のよい語りも見られる。また、「信じない」「わからない」「いや」「違う」「けれども」等の否定形、とりわけ前言を撤回する表現が頻出する。終結部でユダが「金が欲しくて訴え出たのではない」という発言を撤回し、一転「金」を受け取る意思を示し、「ちっとも愛してはいなかった」「嘘ばかり申し上げました」と語るが、逆にユダのキリストへの愛が「真実」であると思わせられる。

作品の発表以来、多くの先行研究があるが、ここでは「語り」及び表現論を中心にとりあげる。磯貝英夫氏は「精神的なものへの無償の純粹な愛を持つ俗人・現実家という矛盾した人格設定がそこに現れる」とし（ユダの、イエスに対する、愛と憎、牽引と軽蔑、情念と認識など

の間で揺れ動く心情)や(同年の男としてのジェラシイ)にマリヤも加わり(一人の人物の内部葛藤を多面化)していると述べられる。さらに(独白的告白という表現手段を選ぶことによって、おしやべり芸という作者の得意芸を十分に発揮するとともに、刻々にゆれ動き、また、うち重なる矛盾的な心理のすべてに、論理性や客観性などについてのわずらいは最小限にして、ことばをあたえることに、成功したのである)と評価する³⁾。

また森厚子氏は《回想の中のユダ》と《語りつつある現在のユダ》がその独白においては重ね合わされている」と分析され、語りの中で、ユダが(あの人を私が殺す)という行為の必然性は正当化されるとして、それに至る二つの道筋を指摘される。

森氏の分析を以下にまとめる。ユダの訴えの理由は(美しかったあの人を醜態を演じた↓他人の手で殺させる位なら私が殺そう)と(あの人を私を憎み軽蔑している↓生かしておけない)の二つであり、前者は(愛の行為)、後者は(憎しみ(復讐))である。そして(愛の行為と復讐という相反する命名)が《私があの人を殺さなければならぬ》という一つの決意に冠せられている」とされる。そして、そこに(愛と憎の轉化)があり、その軸として「わかる」「知る」という表現を指摘される。結果として「わかる」「わかってほしい」ユダと「知らない」「わからない」キリストによって「永遠に解けあうことがない」「火と水の関係」となると解釈される。そして「わかりあえない」断絶について、「口惜しい」思いを抱きつつ、最後まで(愛し憎むのか、何故殺し自分も死ななくてはならないのか)は解決できず(どこまでも虚像でしかない言葉の中に唯一つの真実を模索し続け混乱するしかない)とされる。商人として金で売るといふ結末は、(語ることによる模索を放棄した結果得られたもの)という解釈である⁴⁾。

木村小夜氏は森氏の(どこまでも虚像でしかない言葉の中に唯一つの真実を模索し続け混乱するしかない)語りに関して、(自らを回想する告白とは、所詮は一方に収斂しない過去をあえて現在に収束させようとする志向であり、そうでなければ語り終えることができない)と述べられる⁵⁾。

このように「語り」や表現論の焦点は、語りの場(現在)と語られる(過去)との重なり、語る過程での認識の変化や訴えの完遂と語りの関係であるようだ。

人物呼称については野松循子氏の詳細な研究がある⁶⁾。語彙の数量的な調査を基に、(こうした叙述法の上に、『駈込み訴へ』が訴えようとしていることは、ユダ対イエスという対立図式ではなく、太宰的滅びの美学で祭られたキリスト像を、ユダの側の激しい愛慕に委ねて、逆照射する表現形式でそれをより強調しようとする試みだったのではないか)と述べられる。さらに(読み手のわれわれも知らず知らず味わわさ

れ、同化を強いられるという巧みさが組み込まれている」として「ユダの語りから激しく突き上げ、噴出されている「あの人」キリストへのあつい思いに（憑依）した思いを鑑みるとき、逆説的に仮託されたキリストへの「愛」が主旋律として訴えかけてこられるのではあるまいか」とまとめられる。

木村小夜氏の研究展望を参考に挙げる。

「ユダによる内的彷徨の吐露はそれ自体、矛盾を隠そうとはしないが、一つのことを語ろうとすればそれは常にもう一方のことが取り落とされていくこととなるなかで、そこにある恣意的な文脈で自他を語ろうとする姿勢や言葉による事実の《合理化》も生じてくる。ユダの語りはそのような《思惟が言葉を置き去りにして走》った（風の便り）昭和十六年十二月）結果の饒舌とはいえまいか。二項対立を越えた新たな視点からの、イエスとユダの関係説明が求められている」²⁾

以上の先行文献に知見を得つつ、本稿では人物呼称と「美しい」の評価語を中心に分析・考察を行う。

三、人物呼称の数と場面、意味づけ

テキストの人物呼称の出現傾向について概観する。ユダはキリストを基本的には「あの人」と呼び全文中で計132回、それに対して「私」（ユダに関わる一人称）は188回である。遠称「あの人」の多用により「キリスト」との一定の距離を示すが、回想②の二人だけの春の海辺の会話の場面では「あなた」（8回）と呼びかける。しかし、「私」の求愛ともいえる申し出は「あの人」から他の弟子たちの事情を理由に拒絶される。さらに回想③6日前のマリヤの油壺事件では、「あの人」のマリヤに対する様子にジェラシーを感じ「口惜しい」（3回）と語る。「口惜しい」「寂しい」等のユダの心情については煩雑を避けるために表に記載していない。次の回想④エルサレム入城の場面では、キリストの姿に対して近称「この人」が2回使用され、醜態・憐憫といった感情を表出する。さらに回想⑤最後の晩餐の場面では、キリストに対して自分と同じく「寂しい」ととらえ「あなた」の二人称が10回出現し、再び強い「愛」を示す。しかし、最後の晩餐の洗足の場面では、他の弟子たちの前でキリストに「潔くない」と指摘され、先によみがえった強い「愛」は「憎」に振れ、「復讐の鬼」と化す。ついにはキリストを「あいつ」（計4回 回想⑤2回 結尾部2回）「あれ」（1回）と呼び、小鳥の囀りへの言及などにみられる混乱はありながら、疎まれていた商

人を初めて名乗り訴えを完遂する。

改行が極めて少ない本文のため便宜上、場面分けを行った。そして、各場面の冒頭と結末の文章、総文字数、文数、呼称の頻度として使用回数を挙げている。

全体として、冒頭部Aと結尾部Bが語りの現在であり、その中に回想が①⑤と時系列(古いものから)で並べられる。

一文の平均文字数は、AとBは(A 5・81、B 18・1)と他の場面に比べて短文化が顕著である。「駄込み」「訴へ」ている様子で、興奮した性急な口調であることがわかる。また、「旦那さま」という語が、最後の場面Bに5回と多いことは、訴えの完遂として訴えの相手が強調されている。「旦那さま」は回想①②⑤では出現しない。これは、聞き手意識が減衰して、物語場面に没入していることを示すのではないだろうか。

「あの人」は132回、様々な感情を含みこむ呼称で全体に渡る。「あ」系の呼称は遠称であり、対象に対して一定の距離を持ちながら、読者の想定内の人物を示すが、明示されず読者を宙づり状態にする。ちなみに遠藤周作の小説『沈黙』で同じくキリストに対して「あの人」という呼称が使用されている⁽⁸⁾。本テキストでは「あの人」の呼称に込められた感情は変化し、時には他の呼称に変化していく。

一人称の「私」が18回と多いのは「あの人」と向き合う「私」の自意識の表れであり「対等意識」と繋がる。

各場面の語りの最後にキリストに対する強い負(怒り・憎しみ等)の感情が表出されている。分析のための場面分けであるが、回想場面の最後に強い負(怒り・憎しみ等)の感情が示されることで、次の場面の正負の振幅が大きくなる可能性を持つと考えられる。さらに場面の文例に即して考察を試みる。

申し上げます。旦那さま。あの方は、酷い。酷い。はい。厭な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かして置けねえ。

冒頭部は「駄込み」「訴へ」という切迫感と躍動感に満ちた表現である。「旦那さま」(役人)への相手意識により「申し上げます」と謙譲語が始まるが、興奮状態のためか「あの方は、酷い」と常体かつ短文であり、「酷い」が反復される。また、すぐに「はい」と訴えの場面に引き戻され「厭な奴です」と敬体になる。しかし、再び「ああ。我慢ならない。生かして置けねえ」と怒りが露わになり自己の感情に没入した表現となる。その後「旦那さま」の呼びかけに呼応するように「はい。はい。落ちついて申し上げます。申し上げます。あの人を、生か

表 各場面における文の長さ・

種類	具体的項目	冒頭部 A 駆け込み訴える場面	回想① 今までの事	回想② 春の海辺
文の長さ	総文字数	64	1693	1907
	文数	11	55	63
	1文の平均文字数	5.81	30.78	30.26
呼称 (人称)	旦那さま	1		
	あの人	1	23	25
	私		28	31
	あなた			8
	この人			
	あいつ			
	あれ			
キリストに対 する評価語 (抜粋) 愛・尊敬	美しい(美を含むもの)		2	4
	優美			
	優しい		1	
	愛している(愛)			7
キリストに対 する評価語 (抜粋) 憎・軽蔑	酷い	2		
	厭な	1		
	悪い	1		
	傲慢		1	
	自惚れ屋		1	1
	嘘つき			1
	出鱈目			1
	だらしない			
	ヤキがまわった			
	見込みがない			
	凡夫			
	ただの人だ			
	落ち目			
	薄汚くさえ思う			
狂った				
本文	各場面の 始めの表現	申し上げます。旦那さま。あの方は酷い。酷い。はい。厭な奴です。悪い人です。ああ、我慢ならぬ。生かして置けねえ。	はい、はい、落ち着いて申し上げます。あの方を、生かして置いてはなりません。世の中の仇です。はい。何もかも、すっかり、全部、申し上げます。	一度、あの方が、春の海辺をぶらぶら歩きながら、ふと、私の名を呼び、「おまえにも、お世話になるね。おまえの寂しさは、わかっている。
本文	各場面の 結びの表現		あの方は、いつも私に意地悪くしむけるのです。	あの方は、私の無報酬の、純粋の愛情を、どうして受け取ってくださらぬのか。ああ、あの方を殺してください。

して置いてはなりません」と続く。このように、「訴へ」は愛と憎、尊敬と軽蔑の両極にわたり、評価も「傲慢」「自惚れや」から「美しい人」と大きく振れる。

「あなた」は19回である。回想場面②海辺の場面と最後の晩餐の場面⑤に多く見られる。②春の海辺の場面はユダにとっては最も幸せな記憶として、他者を介在させずキリストに直接呼びかけるものである。聞き手（旦那さま）は消去され、「あなた」は尊敬・愛を強く含む呼称となる。しかし、最後には「あなた」からの拒絶による「私」の落胆が準備されている。

「あなたお一人さえわかつていて下さったら、それでもうよいのです。私はあなたを愛しています。私はあなたから離れることができません」と回想を語る場面となり呼称も「あなた」から「あの人」に変化する。

回想⑤最後の晩餐の場面では、キリストへの愛の高まりを見せるが、その後の「潔くない」という指摘で「憎しみ」に大きく振れる。「その卑屈の反省が、醜く、黒くふくれあがり私の五臓六腑を駆けめぐって、逆にむらむら憤怒の念が炎を挙げて噴出したのだ」とある。「愛憎」の振幅が最も大きい箇所といえる。

「この人」は、2回と少ない。キリストへの愛はありながら、軽蔑を含む「憐憫的」感情の表現である。

あの人の一生涯の念願とした晴れの姿は、この老いぼれた驢馬にまたがり、とほとぼ進むあわれな景観であったのか。私には、もはや、憐憫以外のものは感じられなくなりました。実に悲惨な、愚かしい茶番狂言を見ているような気がして、ああ、もう、この人も落ち目だ。

このように「あの人」で始まった表現が「憐憫」を経て「ああ」という嘆きとともに「この人」も「落ち目だ」となる。もう一つの例が「この人は駄目なのです」であり「この」という近称は心理的接近により母性愛的（保護者的）な気持ちを含む「幻滅」といえる感情であるといえる。キリストの行動や姿から「美しさ」を見出せず、幻想が崩れたことによるが、これはユダの「対等意識」にも関係する。ちなみにキリストがマリヤを「この女」と呼んでいる。こ系の指示語が示す心理的距離の接近が「愛」に結びつく可能性もありながら、「私」の場合は憐憫・軽蔑に向かう。

「あいつ」の呼称は⑤最後の晩餐の場面2回、B最後の訴えの場面2回、計4回である。強い「愛」が「憎」に振れた呼称で、ユダは感情

の抑制が出来ず聞き手意識も見られない常体表現である。

このように弟子たち皆の前で公然と私を辱めるのが、あの人のこれまでの仕来りなのだ。火と水と。永遠に解け合う事のない宿命が、私とあいつとの間に在るのだ。

ユダが強い憎悪に転じるのは、他の弟子たちと関わっていることが多い。これはユダの自尊心や自負心、競争心に関わるものであり、他の弟子たちと自分は異なるという自意識の強さも加わり負の感情が増幅される。②春の海辺の場面でキリストへの求愛が、他の弟子たちの事情を挙げて拒絶されたこと、⑤最後の晩餐の場面も弟子たちの前での指摘（「潔くない」）が強い憎悪を呼びこむ。その後、「あいつ」（2回）の後、「あの人」「あれ」「あの人」と変化しながら、最終場面に続く。

火と水と。永遠に解け合う事のない宿命が、私とあいつとの間にあるのだ。犬か猫に与えるように、一つまみのパンくずを私の口に押し入れて、それがあいつのせめてもの腹いせだったのか。ははん。ばかな奴だ。旦那さま。あいつは私に、おまえの為すことを速やかに為せと言いました。

（略）

ざまあみる！ 銀三十で、あいつは売られる。

短文、常体の連続により感情の激化が見られる。また「火と水」「私とあいつ」の語順や比喩は、「犬か猫に与えるように」という表現も含めてユダの心理の反映である。「ははん。ばかな奴だ」はまさに肉声の響きがあるが、その直後に、「旦那さま」と呼びかける。終結部は「あの」から「卑しめられてきた」商人ユダとして、最も汚い「お金」と手段「売る」での完遂に疾走するが如く向かう。

「あれ」は一箇所のみで「もう私は我慢ならない。あれは、いやな奴です。ひどい人だ。私をいまままで、あんなにいじめた」と「我慢ならない」「ひどい」「いじめた」と被害感情が強いことが特徴である。また直後の「小鳥が啼いてうるさく耳につく」は精神的に錯乱していることを示している。

夜に囁く小鳥はめずらしい。私は子供のような好奇心でもって、その小鳥の正体を一目見たいと思いました。

（略）

あの人を怖れることは無いのだ。卑下することは無いんだ。私はあの人と同じ年だ。同じ、すぐれた若者だ。ああ、小鳥の声が、うるさい。耳についてうるさい。どうして、こんなに小鳥が騒ぎまわっているのだろう。ピイチクピイチク、何を騒いでいるのでしょうか。おや、その金は？

小鳥の囁りの内実は、キリストを売るといふ行為を遂行しようとする「私」の自意識、内心の嘆き、内なる呼び声としての良心を表したものと解釈できよう。いずれにしても、「売る」行為を完結させようとする「ユダ」の葛藤の表れであろうが、「ずっと囁っていた」小鳥の声として最後に言及している。

ユダの「語り」は既に指摘されたように、語りの現在で「旦那さま」に訴えている今と、イエスと共にあった時が重なっている。本稿では、森氏の指摘にもある二つの相反する理由が呼称の「この人」と「あなた」に関わるとし、呼称や評価語、結びの表現を検討する。

「醜態を演じたので人の手ではなく自分の手で殺す」ことが語られているのは、③マリヤの油壺事件と④エルサレム入城が中心である。前者では、呼称は「あの人」であるが「嘘つきだ」「だらしがない」「ヤキがまわった」「見込みがない」「凡夫だ」「ただの人」と幻滅という心理的な近さがみられる。同じくこの場面には「口惜しい」（3回）があり、最後には「他人の手で殺させたくない。あの人を殺して私も死ぬ」とある。

また後者の④エルサレム入城では、近称である「この人」が2回使用され、「落ち目」「薄汚くさえ思う」「狂った」という具体的な表現となる。最後の表現は「いい気なもんだ。もはや、あの人を罪はまぬかれぬ。必ず十字架。それに決まった」である。「あの人」と呼びながらも決断を示している。

「あの方は私を憎み軽蔑しているので殺す」ことが語られるのは、A冒頭の場面、②春の海辺の場面、⑤最後の晩餐の場面である。呼称として「あの人」が多用される中で、「あなた」の使用が特徴的である。正の評価は「愛している」（7回）「美しい」（4回）、負の評価としては「自惚れ屋」「嘘つき」「出鱈目」と両極に揺れ、②春の海辺の場面の最後はこう結ばれている。「あの方は、私の無報酬の、純粹の愛情を、どうして受け取って下さらぬか。ああ、あの人を殺してください」

⑤最後の晩餐では、「あなた」(10回)「あいつ」(2回)が使用されている。愛と尊敬が、「優しい」(1回)「美しかった」(1回)「まさしく神の子」と述べられるが「寂しい」が特徴的である。最後は、「火と水と。永遠に溶け合う事のない宿命が私とあいつとの間にあるのだ。それがあいつのせめてもの腹いせだったのか。ははん。ばかな奴だ」と強い「憎」に向かう。

分析の結果、「醜態を演じたので自分の手で殺す」(愛)の流れは心理的な近さを表す「この人」の呼称とつながり、「あの人に嫌われ憎まれたから殺す」は「復讐」であるが「愛憎」の轉化によるもので、直接に向き合う「あなた」の呼称と関わる事が明らかとなった。前者は「この人」の近称が示すように「愛」からくる「殺す」意識であり、後者は「あなた」の使用にみられる二人だけの世界での求愛とその拒絶からくる「憎」である。また他の弟子たちとの関係で強くなる「弱い卑屈な心」「潔くなっていないかもしれないという気弱く肯定する僻んだ気持ち」も「憎」を強くする。「美しい」存在と崇敬し憧憬の対象として「二人の世界」を夢見たものの、それが完全に拒絶された結果である。このように二つの相反する感情(愛と復讐)と「なぜ自分がキリストを殺す」行動が結びつくのか「わからない」ユダは、問い続け錯乱する。

四、評価語彙「美しい」を中心に

語ることは、自覚していない「自己」と出会う行為だともいえる。その結果、物語る行為は時には自己救済の装置ともなりうる。先に森鷗外『高瀬舟』の語りについて拙稿で論じた。⁽¹⁰⁾よき聞き手としての庄兵衛の存在と高瀬舟という時空間により、喜助は弟殺しを理路整然と語り「晴れ晴れとした顔」で島に向かう。それとは全く異なる語りが『駄込み訴へ』である。

『高瀬舟』に対して本テクストは「駄込み」「訴へ」と動的であり進行中である。つまり語る時点で、すでに「裁き」(結果)があったものと、「今」まさに「訴へ」を遂行していることが異なる。

『駄込み訴へ』について人物呼称との関わりで、「この人」「あなた」の呼称が語りの方向性に関わると述べた。「寂しさ」を共有したい愛が、「火と水」のように理解し合えないこと、また、「わかかってほしい」が「わかってもらえない」ことによって、深い憎悪に転ずること、「あの人」と対等になれるという願望がないまぜになり追いつめられ「裏切り」という禁断の手段によって行為を遂行することとなった。しかし、見方を変えれば、これらすべては、ユダの自己内の劇、つまり一人芝居である。

聞き手である「旦那さま」についてもいくつかの論考がある⁽¹⁾。読者は「語られている」相手、このテキストでは「旦那さま」に同化しうる表現のシステムではあるが、必ずしもそうはならない。むしろ「私」に同化する可能性が高いとも思われる。肉体化された文体のリズムに乗り、「憑依」するがごとく「私」に同化しうる仕組みがある。

次に「私」が「あの人」を評価または規定する表現を考える。「私」は「あの方は美しい」と繰り返して述べ、「金銭ゆえに、優美なあの人くらいいつも軽蔑されて来たのだった」と語る。

前掲の表にあるように、「美しい」は8回、「優美」は1回である。「美しい」はすべて「あの人」の呼称につながり、冒頭のA、回想①に多く見られる。「わたしはあの人を、美しい人だと思っている。あの方は美しい人なのだ」と春の海辺の回想で繰り返す。次に「美しい」が使われるのは、回想の後半で「あの方は嘘つき、出鱈目」とあり、「私はてんで信じていない」と続き「けれども私は、あの方の美しさだけは信じている」とある。神の御子としては「信じていない」が、「美しさだけは信じている」という論理である。

次に出てくるのは最後の晩餐の場面である。

あなたは、いつでも優しかった。あなたは、いつでも正しかった。あなたはいつでも貧しい者の味方だった。そうしてあなたは、いつも光るばかりに美しかった。あなたは、まさしく神の御子だ。

これは「私」が「キリスト」への愛を過去形で語った場面である。「嘘つき」「凡夫」「薄汚い」「神の子など信じない」という前言をすべて撤回したが、訴えの完遂に向かいユダは「優しかった」「正しかった」と過去形で語る。

野松氏は前掲の論文で、太宰文学全体の「美しい」を調査している。そして結論として「美しい」が使用される場合は「なんらかの欠落や喪失や滅び、犠牲を前提としている」と結論づけている。

太宰の「美しい」が「欠落」「喪失」「滅び」「犠牲」を含むことは、本テキストでも「花は、しばまぬうちこそ、花である。美しい間に剪らなければならぬ」にみられる。そして、その「剪り取る役目」を「私」が担うという決意に繋がっていた。また、「聖書」の引用としての「外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまざまな穢れとに満つ。（以下略）」も、「美しい」が「欠落」「喪失」「滅び」と繋がることわかる。ユダの決断の決定的な引き金となったのは「潔くない」というキリストの言葉である。「美しい」はキリストへの評価語であるが、「同じ」「人

の子」の意識から、「キリスト」的なるものに近づきたい「私」の目標とする世界であった。「美しい」と表される世界への同化願望である。「精神家」に近いといえるが「精神家」の内実が不明瞭で漠然としているように「美しい」も極めて抽象的であり、すべて「ユダ」自身が作り出した「幻想」である。その意味でユダは「自己内の劇」において一人で格闘し、その結果自滅したことになる。その過程を述べたのが『駄込み訴へ』であるといえる。

『駄込み訴へ』の語彙「美しい」は滅びや犠牲を含みこみながら、極めて抽象的である。それに対して「私」は「現実家」で具体・現実の世界を生きる存在で、憧れながらも「精神家」「趣味家」にはなりきれなかった。「美しい」に代表される正の評価語が「優美」「正しい」あるいは「愛している」と抽象的であるのに対して、負の評価語が、具体性を持ち多種多様である。「傲慢・自惚れ屋・嘘つき・出鱈目・だらしない・ヤキがまわった・見込みがない・凡夫だ・ただの人だ・落ち目・薄汚くさえ思う・狂った」の語は、すべていわゆる「人の子」に見られるものである。

五、おわりに

人物呼称と「私」の感情の変化の関連を捉えた。

語られた言説から「私」の感情を読み解くことの不可能性を痛感しながら、人物呼称に焦点を置いて考察を試みた。結果としては森厚子氏と野松循子氏の先行研究をつなぐ形となったが、基礎資料となれば幸いである。

発表直後の文芸時評(『文学界』昭和十五年三月)で『駄込み訴へ』の中に描かれているのは、ユダでもキリストでもない。太宰治自身の姿」と林房雄が評している。作家論の立場ではないが、この分析を通じて、あらためて人間の奥深くに抱えている矛盾、愛と憎しみ、信頼と裏切り、正常と狂気、自意識、競争心、嫉妬などが凝縮された類まれなテクストであると認識させられた次第である。

本文は数量的なデータ収集のために青空文庫作成ファイルから引用した。

底本:「走れメロス」新潮文庫、新潮社 一九九九年二月二十四日公開 二〇〇八年十月三日修正

注

- (1) 拙稿「太宰治の表現―『駆込み訴へ』における独白体について―」（『国語表現研究』第十二号 一九九九年三月）
- (2) 吉本隆明『定本言語にとつて美とはなにかⅠ』（角川学芸出版 二〇〇一年九月、三二〇頁）
『定本言語にとつて美とはなにかⅠ』（角川選書 一九九〇年八月）を文庫化したものより引用している。
- (3) 磯貝英夫「饒舌―両極思考」（『国文学 解釈と鑑賞』一九七九年七月）
- (4) 森厚子「太宰治『駆込み訴へ』について―語りの構造に関する試論」（『解釈』一九七九年二月）
- (5) 木村小夜『太宰治の虚構』（近代文学研究叢刊55 和泉書院 二〇一五年二月、一八三頁）
- (6) 野松循子「文体・表現から見た『駆込み訴へ』」（『新編太宰治研究叢書 2』（近代文藝社 一九九三年四月、一三一頁）
- (7) 木村小夜『太宰治 全作品研究事典』（神谷忠孝・安藤宏編 勉誠社 一九九六年十一月、六一頁）
- (8) 遠藤周作『沈黙』（新潮社 一九六六年）
「踏絵のなかのあの人は多くの人間に踏まれたために摩滅し、凹んだまま司祭を悲しげなまなざしで見つめている。（略）その時、踏むがいいと銅版のあの人は司祭にむかって言った」という表現がある。『沈黙』の中で「あの人の呼称について、熊倉千之氏が『日本人の表現力と個性』（中央公論社 一九九〇年）で「不即不離の立場で司祭を描写できる立場で、「あの人」という表現には距離感がある」と問題を提起している。
- (9) マリヤの油壺事件で、油を「あの人」に注いだマリヤを怒鳴った「私」に対して「あの人」は、「この女を叱つてはいけない。この女の人は、大変いいことをしてくれたのだ」（略）この女の人だけは知っている。この女が私の体に香油を注いだのは、私の葬いの備えをしてくれたのだ」とマリヤを「この女」と呼んでいる。
- (10) 拙稿「教材『高瀬舟』（森鷗外）を読む―その空間性と「語り」に着目して―」（『国語と教育』第四十号 二〇一五年三月）
- (11) 高塚雅「太宰治『駆込み訴へ』試論―旦那さまの不在―」（『太宰治「語り」の場』という装置』（双文社出版 二〇一一年十一月、一三二頁）で「旦那さまがユダの愚痴を無言で聞いているのはやはり不自然」として「旦那さま」の不在と結論づける。「このテキストは、ユダの意識の内部でシミュレートとされた訴え（思考）を文字化したもので、テキスト上でのことは、実演されていない架空の出来事である。このようにとらえなおすことで、ユダの〈多声〉の説明がつく」と論じる。ユダの〈多声〉という観点については興味深く今後の課題としたいが、本稿では「旦那さま」は無言の「聞き手」という捉え方で考察を行っている。

〔お詫びと訂正〕

大阪商業大学論集(二〇六号)掲載の「吉行淳之介『驟雨』の一考察―空間に関わる表現を中心に―」に誤植がありました。

二九頁 六行目 『驟雨』おける↓『驟雨』における

二四頁 二行目 中三階↓中二階

二二頁 三行目 二人のコミュニケーションにあり方↓二人のコミュニケーションのあり方

以上 三箇所の誤植について、お詫びして訂正致します。